

監修者序

大学院生をはじめとして若手研究者が、海外の学会で口頭発表する機会が増えている。さらにいくつかの国内学会では英語での発表を奨励している。また、国内で国際シンポジウムが開催される頻度が高まり、自分で発表するのでなくとも、英語での講演を理解する力が必要となっている。英語を国際共通言語とする生命科学の分野において、英語でのコミュニケーションの重要性は言うまでもない。

英語で論文を書くときの論旨の展開の仕方については、誰もがそれなりに勉強している。特別に才能のある人を除いて、英語を母国語としない日本人が英語でのコミュニケーションを苦も無くできるようになるのは難しい。凡人というと誤解が生ずるかもしれないが、いわゆる多くの人々にとって、この課題を克服するコツは「慣れ」である。英語に慣れると、その1つの方法は英語の本をよく読むことであろう。専門書だけでなく小説は大変役に立つ。Vocabularyがなくてはどうしようもないので、できるだけ多くの小説を読んでいることが望ましい。もちろん作家になるのではないから読み漁るにも限度はある。できれば効率よく論文発表や学会発表の「コツ」を会得したいものである。英語論文に慣れ親しむことが国際誌に投稿する上でもっとも必要なことである。ついぶん前になるがはじめから大変上手に論文を書いてきた学生がいた。彼にコツを聞いてみると「様々な一流紙に書かれている表現法を基にして論文を作った。決して我流の文章は入っていない」ということであった。確かに大変読みやすく、したがって理解しやすい書きっぷりであった。たくさん論文を読んでいないとできないことである。

しかしながら、英語論文を書けたからといって、その内容を英語で発表できるかというと、また別の努力が要る。口頭発表については、普段からできるだけ多く英語で会話する機会をもつことであろう。国内に居ては現実的ではない。したがって学会に行く直前にまる覚えするのもやむを得ない方策であるが、それだけでは質疑応答でたちどころに詰まってしまう。質疑での立ち往生はプロの世界では許されない。やはり日頃から慣れておくことが重要である。そうは言ってもむやみやたらと国際シンポジウムに出入りしたり、また実験を差し置いて英会話教室に入り浸るわけにはいかない。

本書は、英語での発表のための「慣れ」と「コツ」を効率よく会得することを目的として企画された。もともと本書は付録としてCDがついていたが、デジタルオーディオプレーヤーなどの普及に伴いCDを聞ける環境にない読者が増えてきたことから、この度、音声ダウンロード版として新しく出版する運びとなった。手持ちの端末で、より気軽に音声を聞くことができるようになったかと思う。

実験の合間や通学・通勤の間のちょっとした時間を使って繰り返し聞くのも良いし、あるいは1回聞くことでポイントをつかむのも良いであろう。講演例を音声で聞くことで、また注釈や説明を読むことで、これまでに気づかなかった視点や考え方を汲み取っていただければ幸いである。本書を通じて国際学会での発表とリスニングがより容易なものとなるものと大いに期待している。

2016年盛夏

恩納村にて
山本 雅